

— 次の記事を読んで、後の問いに答えよ。(60点) —

俳優ではない市井の人にとって「定型の感情表現」が入りやすい場所は「共感」ではないだろうか。インタビューセッションをしているとそう感じる人が多い。

共感をあてにして「私のことをわかってほしい」という思いを募らせてしまうと、ともかく自分への注目を目的とした話の運びをするようになるし、聞き手の同意を取り付けるためにさまざまなテクニックを無自覚に用いるようになる。自分の存在の手応えを他人に貪り求めてしまう。そこまでの飢餓感を抱くのは、人間だからこそではある。

そうなるだけの事情も含めて理解はできる。とはいえ、相手の飢えを満たすために私がいるわけではない。まして、そういう念と付き合ってしまうと話がこじれて前に進まず空転してしまう。

だから「^Aそうですねー」と「そうですか?」のあいだを縫うようにした「そうですか!」で応えるようにしている。「!?」の声音で「わかってほしい」という期待に応えず、かといって「そういうのは良くない」とジャッジもせず淡々と話を聞いているわけだ。

「それは大変でしたね」と共感も高く、エモーショナルな反応を示す方がウケがいいのはわかっている。だけど、それは真摯さに欠けると思ってしまう。何よりその人の声が、音のズレが気になって仕方ないので、そんな態度がとれない。

語る人がひたすら承認されたいという飢えに煽^{あお}られて話す場合、息せき切つての切実さがある。だからと言って、ただちにその人の語ることが真実であり、語る内容の重みを物語っているわけではない。

承認を求める飢餓感に引きずられてしまうとは、自我に乗っ取られたままに話すことでもあり、切迫した声の調子に聞こえても、それはその人のありのままというわけではない。むしろ彩りが派手な分だけ、その人らしさを裏切る饒舌^{じょうぜつ}さをもたらしている。それを声のズレとして感じる。

言葉は意味に置き換えられやすい。比べて音として聞こえる声や佇^{たず}まいのありようは意味ではなく、ただその人の身体の状態を示している。声がズレているとは、「心ここにあらず」ということを示している。その人は「ここ」にいな

い。その隔たりが私に受け取ってほしい意味として強調される。

私はそのような「意味」を受け取らない。そのため取り付く鳥がないと感じるかもしれない。かといって相手の言い分を聞かなかったことにするのもない。ただ目の前にいる人間として応じる。そうして私は意味に隠されたその人の意図について尋ねる。言っていることではなく、言わんとしている音に耳を澄ます。

この「耳を澄ます」を抽象的と感じるのだろう。「どのようにすれば耳を澄ますことができますか？」と具体的に聞かれる機会がそれなりにある。

質問の根底に控えているのは、おおむねこうだ。「正しい見解を知ればトレーニングによって能力を身につけられるはずだし、だからノウハウについて尋ねるのは関心の高さの証である」。残念ながらそれは錯覚ではないだろうか。

ノウハウという具体を知ることが興味を持った事柄への接近に思えて、実際はそこから遠ざかるルートを選んでいる。まして耳を澄ますことは、ミラーリングや相手と目を合わせ、熱心に聞く姿勢を示すといった具体的な形やノウハウにすればかなうわけではない。具体性を求めるほど望んだ結果にはならず、虚しい努力になると思う。

「言っていることではなく言わんとしている音に耳を澄ます」とは、澄ますことを通して話を聞くことではないからだ。相手とのあいだに生じた変化によって「耳を澄ましていた」と後でわかるものだ。

聞くことは話すことと分かち難い。その人の言わんとすることを聞いているからこそ、それに応じて出てくる言葉がある。応じるとは考えることではない。やはり意味を追いかけていては遅れてしまう。

なおのことインタビューセッションでいつも気になるのは、話している内容の意味ではなく、その人の身体に馴染^{なじ}んでいない声だ。馴染んでいないとは、先述した音のズレであり、感情の揺れや波が声に出ていると言ってもいい。

そうした起伏は人間らしさの証であるから、感情の揺らぎに乗って話を引き出すのはごく当たり前かも知れない。たしなめたり同情したり共感したりといった手法が有効な人や場面もあるのは間違いない。ただ、そういうやり取りは人情もののドラマ仕立てであり、あくまでエンターテインメントに思える。

ミュージカルのような喜怒哀楽のメリハリの利いた言葉が語られ、涙を流し、あるいは憤慨しと感情を強く伴うほどに、それらが奏でる物語に浸れる人もいるだろう。湧き上がる感情や感覚は嘘ではないけれど、その感情の抑揚がある種の演技になっていると感じられるから、私にはかえって一本調子に観^みえてしまう。かといって淡々とした口ぶりの中にも演技的な抑揚は潜んでいるものだ。

ドラマティックな語りと淡泊な語り。^Bどちらも私が引つかかるところは音のズレにおいて共通している。何が音をズレさせているのかといえば、それは技巧だ。

冒頭で述べたように、共感への期待をもとにした話の展開に同意を取り付けようとする意図がある限り、それがあつた種の演技になつてしまう。そして、それに付き合う関係性を求めるといったコントロールへの渴望も見え隠れする。

だから私は自分が使い慣れた言葉とそれが生まれてくるところを観てもらうために、このように伝える。

—^Cあなたは「そのように言うこと」によって何が手に入ると思っているのでしょうか。
—^Dそれを手に入れることで失つてしまうものがあるとしたら、それはなんでしょう。

「そのように言うこと」は現に話したことではなく、共感や同意を取り付けようとして話したことの動機だ。ある意図のもとに話したのであれば、そこには特定の結果への期待という方向性があつたはずだ。それに従つて話すことによつて実際には何が得られたのか。

演技やコントロールといった技巧と意図が本人に無自覚であれば、この尋ね方によつて「自分はどのような立ち位置で、どのような視点で話をしたのか。何がその立ち位置と視点を可能にしているのか」が明らかになつてくる。

そして、「手に入れることで失つてしまうもの」とは何か。話の方向性が絶えず「自分が望ましいと思うような理解を得られる関係性」への期待といったように、最初から決まっているとすれば、いつも「現状の自分を肯定される」という想像通りのことし

か起きないわけだ。それを望んでいるのだから、願いはかなっている。

けれども、そうなる何ともし難いことは起きないという失望を抱えることになる。「私のことをわかってほしい」という期待がかなうほど虚しさが生まれてしまう。失っているのは、未知であり可能性だ。

だとすると、その人が共感を望んで話していることは、必ずしも切実に聞いてほしい願いではないのではないか。共感では届かない、もっと深いところに自覚されない訴えがあるのではないか。

もちろん共感への期待がいつだって悪いのではない。自分の悲しみを額面通り受け入れられて、安心して涙を流す。その甘美さの魅力もわかる。けれどもインタビューセッションという場で設定しているのは、「その人の話をその人の話として聞く」とだ。

たいていの場合、人は相手の話を「その人の話」としてではなく、「自分の話」として聞きがちだ。自分の理解できる範囲の出来事を相手に見出しては「わかる」と言い、共感できないことはただちに「わからない」と判断する。わからなさを前にした途端、実際には口にしなくても、心の中で相手の話に対して「つまり・結局・要するに」を持ち出して解釈することに忙しい。その後が続くのは「だから良い・悪い」のジャッジだ。

話している最中に「つまり、あなたの言いたいことは……」という返しが続いて、それが的確だったとして、束の間は「わかってくれて嬉しい」と思うかもしれない。けれども、しばらくすると燃^{くすぶ}る思いが出てくるのではないか。なぜなら相手のしたことは要約であって、決してあなたの思いは最後まで聞かれてはいないからだ。

仮に80年生きてきた人の話を聞こうと思ったら、本当なら80年かけて聞かないといけないはずだ。でもそうはできない。何をどう聞こうとも、その人に届かない歴然とした事実があるにもかかわらず、さらに要してしまっただろう。それよりも大事なのは、ただ話すことをただ聞くことだ。

「その人の話をその人の話として聞く」とは、私が相手の話を聞いて善悪や正誤を決めるのではない。コントロールするのではない。特にコントロールについては鋭敏でありたいと思っている。

都会に住んでいると言葉のやり取りの中で関係性が完結してしまいがちだ。たとえば職場でマウンティングを受けたとしても、本当に身体を用いて組み伏せられたわけではない。マウントを取る人も言葉で優位性を確認し、コントロール願望を満たそうとしている。それへの反撃もやはり同じやり方を試みるだろう。腕力を振るうのは社会性から逸脱するから、互いに言葉によって権力関係を競う駆け引きを行う。その結果、身体はともかく精神的に疲労する。

会社や組織で見られる、このようなパワーゲームで交わされる話法に慣れてしまえば、警告の言葉を使ったり、従属を受け入れさせることも次第に「自然」に感じてしまう。

けれども、それが本当に自然かどうかは明らかだろう。身近な社会性を感じる自然と違って、自然環境において支配欲求を満たそうと思っても、雨も風も思いのままにはならない。だから自身の言動もおのずと謙虚にならざるを得ない。

私は山や海に接して暮らしている人たちの話を聞く機会を得たことがある。彼らは人間だけを相手にしたコミュニケーションを重んじておらず、そのため都会に住む人の感性からは、慮りもなく繊細さに欠けるように見える。だが、^Eここでいう繊細さは、互いに言語に依存したゲームを繰り返すためのものでしかないように思えて仕方ない。

そうした経験を踏まえると、本当は人間も自然の一部であり、誰しも自分の思いのままにはならない存在だということがわかってくる。社会を生きる上でも謙虚さが必要で、そのためには自分の内側に耳を澄ましておかなくといけない。そうすると私にできるのは、傲慢にも相手の話の要約をすることでもなければ解釈でもない。まして完璧な理解ではないことだけはわかる。

そのためインタビューセッションはジャッジをせず、ただ完全に聞く場であろうと定めている。^F「完全に聞く」とは相手を完璧に理解することではない。わがろうと試みる状態のことだ。

そういう時間と空間であるためには、互いの協力が必要になる。どのような関係性がそれを可能にするかといえは、少なくとも話し手がその人のすべてで「今ここ」において話すという態度が必要になる。

共感や同意の取り付けという意図を伴った技巧的な話は、たとえその人の表している態度が真に迫ったものであっても、想起している過去の感情をなぞった「感情的」なものではなく、その人の今ここでの感情ではない。ドラマティックに見えて、何

も出来事は起きていない。過去を反復する感情的な声には抑制の色合いが濃い。その人自身の声からは遠い。

(尹雄大『聞くこと、話すこと。人が本当のことを口にするとき』による。ただし、問題作成の上から本文の一部を改めた。)

問1 傍線部A「そうですねー」と「そうですか?」のあいだを縫うようにした「そうですか!」で応えるようにしている」とあるが、それはどういうことか、説明しなさい。

問2 傍線部B「どちらも私が引つかる場所は音のズレにおいて共通している」とあるが、それはどういうことか、説明しなさい。

問3 傍線部C「あなたは」そのように言うこと」によって何が手に入ると思っているのでしょうか」とあるが、筆者はなぜそのような質問をするのか、説明しなさい。

問4 傍線部D「それを手に入れることで失ってしまうものがあるとしたら、それは为什么呢」とあるが、筆者はなぜそのような質問をするのか、説明しなさい。

問5 傍線部E「ここでいう繊細さは、互いに言語に依存したゲームを繰り返すためのものでしかない」とあるが、それはどのようなことか、説明しなさい。

問6 傍線部F「完全に聞く」とは相手を完璧に理解することではない。わかろうと試みる状態のことだ」とあるが、それはどのようなことか、本文の論旨を踏まえて説明しなさい。

二 次の文章を読んで、後の問いに答えよ。(60点)

かつてないスケールで金融化したグローバルな資本主義経済の不安定性や、グローバルな富の偏在、そして気候変動などの環境危機。資本主義の危機という言葉をさまざまなかたちで聞くようになった。ある者は資本主義の限界や終焉^{しゅうえん}を語り、別の者は資本主義の再構築や「新しい資本主義」を唱道している。いずれにせよ、これまでの資本主義のままでは立ち行かないという認識が広がっている。

そうした認識の広がり背後にあるものを、さしあたって有限性^Aの問題と名指しておこう。有限性は、資源の枯渇やCO₂排出量の許容限界という意味で環境危機の問題であるし、マネーの供給をどこまで拡大できるのかという意味では金融資本主義の問題でもあるが、より本質的には、不断の資本蓄積と無限の経済成長を前提あるいは目的とする資本主義の持続可能性が問われているということである。

もはや旧聞に属するが、2004年に地球圏・生物圏国際協同研究計画(IGBP)が発表した「大加速 Great Acceleration」のコンセプトとそれを示すグラフによれば、縦軸にとられた社会経済の諸指標(世界人口、世界GDPや世界の運輸総量など)と諸地球システムの指標(CO₂排出量、NO_x排出量や熱帯雨林の減少量など)^(注)が、1800年以降を境に急激な増大を示しており、このまま無限に向かって進むことに不安を覚えずにいることは難しい。

あらたに人口に膾炙^{かいしや}しつつある「人新世^{じんしんせい}」というコンセプトも、有限性を示唆するものである。もともと「人新世」の概念は、未来の地質学者の視線に立って、たとえばプラスチックごみの堆積層や原子力エネルギー使用の痕跡、あるいは化石燃料の大量使用による温暖化の痕跡など、19〜20世紀以前と以降との間に不連続な地質学的変化が刻まれているという洞察から提起されたものだ。これまでわれわれは完新世という地質学的年代を生きるとされてきたが、未来の地質学者から見れば、われわれはすでに異なる地質学的年代を生きているというわけである。

だが、この「人新世^B」という概念がひろく人文学・社会科学にインパクトを与えているのは、単に地質学的な不連続性だけが

理由ではない。「人新世」という言葉が広く知られるきっかけを作った大気化学者であるパウル・クルッツェン（オゾン・ホールの研究で知られるノーベル化学賞受賞者）は、「地球環境における人間の痕跡が今や広範で激しくなったことで地球システムの機能に衝撃を与え、自然の他の巨大な力に匹敵するようになった」点を強調している。つまり、いわば人間自身が地質学的エージェントとなり、「多くの面で人間活動が支配的となった」がゆえに、新たな地質時代に「人」新世（Anthropocene © anthropo-は「人間」を意味する）という語が与えられているわけである。

あらためて指摘するまでもないことであるが、人間は自然環境を自らの生存の条件としつつ、その自然環境から資源や道具を取り出して使用することで、生物としての再生産を行い、さまざまな文明を構築してきた。人間が自然を資源や道具として使用する規模が十分小さければ、自然にそなわっている回復力によって、人間が生存の条件としている生態系の均衡は維持される。その限りでは有限性の壁は視界の外のはるか遠くにあり、有限性を意識しないという意味で無限に開かれていたといってもよい（もっとも局所的には有限性に直面して滅んだ文明の例は少なくない）。

しかし人間の「巨大な力」による自然の使用が「広範で激しく」なりすぎると、生存の条件としての自然が地球規模で破壊され、生存の条件としての地球そのものが脅かされる。そうすると、遠くにあると思っていた、あるいはそもそも存在を意識すらしていなかった有限性の壁が突然あらゆる人間にとって不可避なものとして迫りだしてくる。その有限性の壁は私たちに、自然が、人間にとって一方的に利用できる資源の採掘場や廃棄物処理場ではなく、生存の条件として人間のあり方を規定する存在でもあることを思い知らせる。

フランスの科学人類学者であるブルーノ・ラトゥールは、人間と非人間（モノ）とのあいだに存在論的な非対称性を前提とすることが近代という時代を規定していると指摘する。ひらたくいえば、理性や意思をそなえ自由を行使して世界を創り出す主体としての人間と、その人間による創造の素材や道具として用いられる客体としてのモノとのあいだに本質的な区別が敷かれた上に成り立っている社会が近代だという。

大航海時代、科学革命、そして産業革命と、近代において人間は地球を、探索され、分類され、分析され、開発されるべき客体として扱ってきた。というより、そのような客体として地球を見るようになることが、とりもなおさず近代化であった。近代人が自然をあたかも無限に与えられたものとしてふるまうことができたのは、その前提にこうしたヒトとモノとのあいだの非対称的な存在論的区別があったからである。人間を人間以外のモノから切り離された存在だと捉える人間観が、人間を無限に開いたというわけだ。

^E こうした存在論的体制の転換は、さまざまな窓を通して観察することができる。たとえば地球の地図化の歴史はいかに進んだか、実験という手法による知の生産がいかに正統性を獲得したか、あるいは奴隷制など人間のなかに引かれた人間とモノとの境界線にどのような論理があったかといったような問いがそれである。そうした窓のひとつに「所有」を挙げることができる。

一般に近代法における所有権は、モノを自由に直接かつ排他的に支配できる権利として、ヒトがモノを直接支配する権利である物権のもつとも典型的なものである。一見当たり前のように見える、こういった所有権のあり方の背後にも、人間と人間以外のモノとのあいだの非対称性が前提にある。そもそも、権利主体としての人と権利の客体としての物を分けるという二分法自体は、ローマ法から続く法的思考の枠組みである。しかし特に近代法において、ヒトの概念は、意思に人格の本質を見いだす哲学的前提のもとで、抽象的な権利義務の帰属主体とされる一方、モノの概念は、そうした抽象的なヒト以外のすべての具体的な存在を表すものとなった。現代の日本の民法における所有権では、その客体となるものの適格性について、有体性や排他的な支配可能性とならんで非人格性が挙げられるが、つねに所有の主体であり、決して所有の客体とならない「人間」は、そうした近代的な人間観に根差すものである。

(山下範久「資本主義にとっての有限性と所有の問題」岸政彦・梶谷懷編著『所有とは何か——ヒト・社会・資本主義の根源』による。ただし、問題作成の上から本文の一部を改めた。)

(注) 高温で物が燃えるときに、空気中の窒素(N)と酸素(O₂)が結びついて発生する窒素酸化物の総称。

問1 傍線部A「有限性の問題」とあるが、それはどういうことか、説明しなさい。

問2 傍線部B「人新世」という概念がひろく人文学・社会科学にインパクトを与えている」とあるが、その理由を説明しなさい。

問3 傍線部C「有限性の壁が突然あらゆる人間にとって不可避なものとして迫りだしてくる」とあるが、それはどういうことか、説明しなさい。

問4 傍線部D「人間を人間以外のモノから切り離された存在だと捉える人間観が、人間を無限に開いたというわけだ」とあるが、それはどういうことか、説明しなさい。

問5 傍線部E「こうした存在論的体制の転換は、さまざまな窓を通して観察することができる」とあるが、ここでいう「存在論的体制の転換」とはどういうことか、本文の例を参考に、具体例を一つ挙げたうえで、説明しなさい。

問6 傍線部F「決して所有の客体とならない「人間」とあるが、なぜ人間は所有の客体とならないのか、その理由を説明しなさい。